



史學童觀抄
初篇
下

リ伊5
4051
6-2



伊5
號4051
卷6-2

人皇五十六代
清和天皇

後号水尾帝
嘉祥三年降誕
天安二年十一月
即位 在位十八年
元慶四年十二月
崩 壽三十一

貞純親王

秋桃園親王
清和帝第六皇子
延喜十六年薨



貞純親王肖像

經基王 号六孫王 寬平六年生

天慶二年始賜源
姓故此號曰清和
源氏依討西海賊
純友功為正四位
上鎮守府將軍下
東國治陸奥天德
元年十一月薨歲
六十四崇神子京
師西八條

滿仲 号多田左馬助 延喜十二年

四月生從四位上
左馬頭兼伊豫守
聽内昇殿長德三
年八月卒行年八
十八

賴光 幼名文珠丸 天曆八年七月生

上忍介左馬權頭

為肥前守美濃守
正四位下陸奥守
鎮守府將軍聽内
昇殿治安元年七
月卒時攝津守行
年六十八

賴信 冷泉判官代 甲斐守

天延二年生為兄
賴光養子鎮守府
將軍河内守從四
位上聽内昇殿永
兼三年九月卒行
年七十四

賴義 幼名千手丸 長保五年

四月生正四位下
鎮守府將軍伊豫
守聽内昇殿合戰
於陸奥九年永
保二年十一月卒

源經基王肖像



源賴光朝臣肖像



行年八十

義家 幼名源太丸
八幡太郎

長曆二年七月生
從五位下出羽守
從四位上左馬權
頭正四位上前陸
奥守鎮守府將軍
聽內昇殿長治二
年八月卒行年六
十八

為義 幼名陸真四郎
實者義親子

為祖父義家養子
檢非違使從四位
下六條判官入道
号義法房保元元
年七月死

義朝 保安四年生
從四位下左馬
頭播磨守

平治二年正月於
尾張野間為長田
忠致所殺行年廿
八後至文治元年
就其墓贈內大臣
正二位

義平 号惡源太
平治乱後潛

匿於野々伺平氏
志不成河捕永曆
元年正月被斬于
六條磧時年二十

朝長 中宮木夫進
平治兵乱時

中流矢依難歩父
義朝裁之時年十
六

頼朝 幼名白幡丸
久安三年生於



源頼朝臣肖像

源義家朝臣肖像



尾張幡谷平治中
右兵衛佐文治元
年為六十六ヶ國
總追捕使同年正
二位大納言右近
衛大將軍建久三
年征虜大將軍治
世廿年正治元年
薨行年五十三



右大將源
頼朝卿肖像

史學童觀抄卷二

源氏上 正記

源氏は人皇五十六代清和天皇より出づ天皇第六の御子貞純親王

四品少叙 兵部卿兼任 兵部卿 兵部は總て軍旅の事を掌らる文武相 無る器量と撰んで任せらる重き官之 桃園

親王と稱す親王の二子あり出づ經基經生といふ皆姓源氏を賜ふ經基

武幹あり騎射を善す親王は帝の第六子なるを以て世に經基を呼ぶ

六孫王といふ天慶中武藏介と為る平の將門の反に間行入て奏するに

より從五位下み拜 藤原の忠文に從ひ將門を伐又小野好古に從つて

賊黨藤原純友を伐ち終に正四位下み叙 鎮守府將軍に任ず子孫世々

武臣と為る其旗は白きをを用ふ八子有長男滿仲攝津の多田に生る

父の職位を襲ひ関東の志を得たり冷泉帝安和二年橘繁延藤原
千晴等の乱を謀り一時武藏掾満季と繁延千晴を捕へこれを
流す満仲嘗て諳りく武臣天子を衛る利刀無かる處くは乃筑前
より良治を召し六十日の間鍛錬せし二刀を得たり一を鬚截と名あり一を
藤丸と名あり之を子孫に傳ふ満仲官左馬頭に至る卒して從三位を贈り
四子あり頼光頼親源賢頼信といふ源賢は僧と爲る頼親事あり流
る處す子孫大和に居るを以大和源氏と稱す頼光材武名あり東宮
大進と爲る **東宮大進** 春官坊中の諸公事を掌る 五位の任あり器量の人を撰する 二子あり長男頼國子孫
世々多田に居る摂津源氏といふ頼信亦勇敢善兵を用ふ長元中甲斐
守と爲る上総介忠常乱を作す朝廷上野介平直方を令し東海東山の

兵を率て之を討む三歳めて平らる事能はば乃頼信を以て常陸介
とて之を伐む頼信子頼義等を率ゐ進んで鹿嶋に赴く忠常船を
奪ひ柵を海岸に列ね濟る處かざるなり頼信衆を聚て戰を議す衆
其舟筏無ければ海を循赴き攻んと謂ふ頼信曰く不可なり賊只險を
恃む吾直に渡つて其備無きを攻は一戰して下す處きちる淺處騎を
渡る可けん誰う知る者無き名と高文といふ者馳て海に入り葦を
立て標と爲頼信軍を麾き之に従ふ忠常驚怖し出て降る免さる
之を斬て首を京師に効す功を以て從四位上を叙し上野常陸介に任す
子頼義沈新武略あり小一条院の判官代と爲る **判官代** 判官代主權代なり
判官の字を加ふるは
院中の官に限ること其
朝官に紛れざる為なり 毎に獵み從ひ善く弱弓を用て猛獸を殪す頼義

一夜夢み八幡神より劍を賜ふ時其妻妊る在て子を生ず長ずる及んで八幡祠前より冠し八幡太郎義家と稱す人となり英果射を善す頼義相模守と為る州俗武を好む頼義義家恩威を以て之を撫する依り豪傑争ひ服し之が用たり事を樂ふ是時當て陸奥の豪族安部頼時諸部落を并せ六郡の酋長と為り猛威を擅るす頼義國守秋田城の介と兵を合て之を伐つ

秋田城介 昔時は陸奥國に賊徒起る時は國大にして制し難き故出羽の秋田城を稱して之を防ぐなり 頼時逆へ撃て大に之を敗る白河の此介を秋田城の介と出羽の介とを是を兼る也

關より北海へ傳て盡く叛り附く朝議頼義を以て陸奥守とす義家及次子義綱と兵を率へ赴き伐頼時兵を解て降る頼義遂に鎮守府將軍を兼承永承七年任滿て將に還ると阿栗川に宿す此夜

藤原の先貞の營を襲ふ者あり初頼時の長子貞任婚を先貞に請ふに聽きふより故を以て之を叛るなり此に於て頼義貞任を執へんと欲す頼時乃兵を奉て反り衣川の關に據る頼義再任を請て兵を發して之を伐頼時の族富忠勇めて衆あり頼義勅旨を以て諭し官軍に應せしむ頼時亦親ら往て之を説く頼義富忠は兵を伏せ要撃せしむ頼時を獲て之を誅す而して貞任の軍猶張善く兵を用ふ官軍數利あり以て糧食給ぐ天喜五年頼義奏し兵食を徴せんことを請ふ是歲十月自より兵千八百を將る貞任を河崎に擊つ時大風雪に會ひ人馬凍飢す貞任選兵四千を以て鳥海に戰ひ大に我軍を敗る我軍餘る所僅に六騎虜急に之を圍み矢を下り雨の如し頼義義家

皆馬を傷從騎下之を授、義家藤原範明等、縦横奮撃す。虜兵相警て曰、八幡太郎なりと、遂に退き去。賴義既免、乃奏す。兵食至らば、且出羽の守臣と力を戮せし。是に於て詔して出羽守を罷免。新守至る亦敢て来り、援軍以貞任、勢益張。且理經清私府を以て官物を徵、令て曰、白符を用ひよ、赤符を用ふる事勿と。赤符は即官符なり。賴義益困す。對守る數歲、康平五年、任滿高階經重代り。任す國民、賴義を慕ふ。經重も服せ、經重已を得て去る。是に於て賴義必らば虜を滅せんと、矢以人を以て出羽の酋清原の光賴及び弟武則、諭す。大義を以てす。七月、武則子身以下萬餘人を率て至る。賴義三千人を以て營々岡、會議し、七陣を為り、武則等を以て分ち

將と、自ら第五陣を將り、進で萩の埒に至り、將小松の柵を攻んとす。清原氏の候騎、誤て火を民家も失す。柵中大に轟、賴義武則騎兵を遣、其衝路を絶、步兵柵を薄つ。之を攻む。深江是則等死士を以て險を冒し、柵に入る。虜大に擾る。貞任、身宗任を以て出戰し、む。賴義麾下を以て横撃し、之を破る。虜遂に柵を弃て去る。乃柵を焚て退く。霖雨の會より、留る事旬餘。磐井以南益々宗任の應、我糧道を侵し、奪ふ。賴義兵を分ち赴き拒ぐ。九月、貞任我兵の寡を瞰、精騎八千を以て来り、襲ふ。賴義長蛇の陣を為り、逆戰ふ。半日、大に之を敗り、走を追て磐井河に至り、武則を以て八百騎を以て夜、之を追し。武則更に死士五十人を揀び、間道より貞任の營を焚、内外

合撃す虜軍大に乱れ去て衣川の險を保へ頼義義家進んで是を
攻武則矯捷の者をして河を踰て虜營に火を縱たし貞任馳き走
る頼義追撃二柵を破り進んで鳥海の柵を抜き又進んで三柵を破り
貞任を追て厨川の柵に至る頼義自ら火を取て神火と号し柵に向て
之を投す會風起り罌柵皆火我軍因て急む之を圍む虜殊死戦す
武則一角を解く虜逃れ走る頼義撃て之を鏖す貞任獨身出闘
我兵叢之を刺し巨楯を載せ六人之を昇て至る腰圍七尺長之を
稱ふ頼義其罪を攻て之を斬其子千代其身重任に及ぶ経清亦縛
せんとする頼義其罪を數鈍刀以て之を斬之曰猶能く白符を
用ふる宗任等皆降る六年二月人を以て貞任以下の首を闕下に獻す

詔して正四位下を叙し伊豫守に任す義家を從五位下を叙し出羽守に
任す義綱を左工門の少尉に為し清原武則を鎮守府將軍と為す八月
頼義八幡祠を鎌倉窟に圍み建て戦功を賽はし七年春頼義義家諸降
虜を以て入朝し奏て有功の將士を賞せんを請朝議未だ許さず故を以て
任ふ赴るに任國登るに私資を以て貢賦を濟是のとき二年上書て重任を
請ふ是より先諸降虜皆流る處に義家宗任の勇を愛し特之を親信す
宗任亦遂に心を傾け之を事義家藤原頼通の第に過陸奥の戦事を
談す博士大江匡房別室に在て之を聞て曰好男子惜いかな未だ兵法を
知らずと宗任微ら之を聞愠りて義家告て義家曰或は然らんと匡房の
出るを見て之を禮し遂に就て學ぶ兼曆三年美濃乱る義家詔して往

之を定めし乱人之を聞て皆遁る。永保二年頼義卒す。歳八十。同三年義家詔一陸奥守と為。鎮守府將軍を兼。初清原武則二子あり。武貞武衡と。武貞真衡を生む。又藤原経清の寡婦が納。亦経清の子清衡を嫡嗣と。家衡清衡以下皆之の臣と。事ふ。其姑夫吉彦秀武直衡を怨む。事あり。兵を奉て之の背き家衡清衡を説て同意せしむ。時義家任事あり。之を攻て利あり。吉彦秀武等と與。兵を合て金澤の柵を據る。義家之を見大に怒り。寛治元年九月自ら數萬騎を將。之を攻柵を去る事。數里雁行の乱を望み見ると曰。是伏有ありと。兵を縱て搜索果して獲て之を鑿一痕と謂て曰。兵法は言鳥乱は伏あり。我学ばんは殆ふらん。遂に進で柵を圍む。相摸の人鎌倉景政挑戰ふ。敵將鳥海弥三郎射て

其右目の中つ景政箭を抜る。追て終ふ之を射殺す。武衡險を據死闘。多く我兵を傷ふ。義家之を攻て未だ下す能はば義家の身。義光新羅三郎と稱す。亦勇知あり。技能多し。是時右兵衛尉為り。京都に在て兄の軍利ありとを聞奏し。赴き援けんと請ふ。許されば遂に官を舍て之を赴。義光素音を好む。嘗て豊原時元を学ぶ。時元已死。其孤子時秋。義光を送行。足柄山に至る。月明に會ふ。義光因て笙を吹盡く。学ぶ所を時秋み授て。別去て。遂に陸奥に至る。義家喜泣て曰。吾汝を見る。猶先君を見るがごとし。乃相俱に進。攻柵固して。枝は吉彦秀武降て。我軍に在り。進て説て曰。且久を持て之を困す。願て義家之に従ひ。命を下て。戦を休。武衡人を来り。言見て曰。我軍事無を苦む。我の健兒龜次あり。

一カ人を得て之を角せしめんと乃鬼武者を遣て角力せむ鬼武者勝て
 之を殺す虜愧憤山て戦ふ已して虜營食盡、羸兵を出し來り
 降る秀武曰く是糧を給るなり宜しく斬せしと義家又之を從ふ虜益窘
 義光因て降を乞ふ聽かざる再乞ふ且義光が柵中の臨て要結せんと請ふ
 義光往んと欲す義家之を止る乃秀方之を往し虜又を露ほし之
 を待す秀方夷然として武衡乃金を出して之を賂ふ秀方之を卻て曰
 我輩將り且暮之を分取せんとなす汝が賂ふを煩はざるを刀を撫りて出
 時天漸寒し軍士凍を恐る一夜義家令を出して曰く我營を焼て燬を
 取今夜虜柵陷らん復營を用ひばと果して黎明柵中の火起る家衡
 遁る武衡池水中に潛みあるを義家之を獲て將り斬るとす武衡哀を

義光乞ふ義光請て曰く降る者は宜しく之を赦すなりと義家色を作
 して曰過を悔來り歸宗任のとき者是之を降と謂ふ擒せしめて活生を
 求む降る非る也遂に之を斬家衡其下の者も殺さる義家武衡家衡以
 下の首を獻せんと欲す廷議之を私闘ありと謂ふ許されば遂に首を途
 中棄て還る義家父祖の業を兼善將士を撫り其陸奥を征する前
 九年後三年東國の士民皆其恩信を服し相與り請ふて其子弟を留免
 之を擁戴して自其家人と呼び義家を稱し八幡公といひ威名朝夜を編
 白河法皇嘗て夢魘を患ひ玉ひ義家の詔して其兵器を獻せしめて
 之を鎮す義家一玄弓を獻し御枕上を建即患無し法皇問て曰はく
 乃東征の執る所無きかと對て曰臣記申す所と法皇之を嗟賞し玉ふ

相撲の伎は鏡神代に在ては建御雷の神と建御方の神と其力を競べんは權輿一人代に至ては十一代垂仁天皇の御宇野見の宿禰と當麻の跡速と於朝廷角力す此を始として古昔は於林中相撲の節會として毎年七月に諸國の防人を召て相撲を觀覽ありあり其儀式は江家次第に見えり昔時は軍陣組打の爲め武士皆此伎を習ひし事あり馬相撲の違者あり馬の

鬼武者龜次角力於陣頭



並べ云へり鬼武者と龜次の勝負亦後世永祿十二年川中嶋に於て女間彦六と長谷川頼平との勝負は西陣鋒鏑の下にあり角力ありて對手を殺すも至りあり又安元二年河津三郎と股野五郎との相撲天正十五年の木村又藏と貴田孫兵衛との相撲の如きは今世の相撲と同しりて對手を殺すは至りしれども皆後世に至る人口も増多する所を何れも勝負の尤きもの



然れども義家官位甚卑、正四位下右門の尉を以て天仁元年卒す
 歳六十八六子あり義宗義親義國義忠義時義隆といふ義親對馬
 守と為り罪を以て誅せらる子為義幼はして孤義家之を以て義忠の嗣と
 為んと欲す時年十四其明年義家卒す為義遂に直に義家の後を承
 後五年南都の僧兵叡山を攻依て為義命あり為義十七騎と粟子山
 逆ひ撃て之を走らす後十餘歳累遷檢非違使左門大尉と為從五位
 下叙す為義二十三子あり長義朝尤善く戦ふ相模鎌倉に居る関東の
 士人盡く之に附く下野守と為る第八子を為朝といふ猿臂善射幼に
 して諸兄を凌ぎ犯す為義之を患ひ之を曹後子逐ふ鎮西八郎といふ自
 九國の總追捕使と稱し妻父阿曾忠國を以て郷導とて數葉池原田の

諸大姓と戦ひ十五歳の比遂に盡く九國を伏す九國の守介交之を訴ふ
 朝廷太宰府に敕し之を討むるに克つ事能はば為義坐せん官を免せ
 らる為朝聞て之を病ひ須藤家秀等二十八人と俱に京師に至り罪を
 待り是歳近衛帝山崩り帝は鳥羽法皇の寵姫得子に出生る所夙に
 禪を崇徳上皇に受帝の山崩り及で上皇位に復せん事を願ふ法皇
 得子と議りぬ帝の兄を立て候ふ即是を後白河帝と申奉る帝の保
 元元年法皇疾あり得子を召し之を一筐を授け成て曰ふ緩急之を啓
 けし七月法皇崩玉ふ上皇兵を起し白河殿に據る左大臣藤原の頼長
 謀主として四の兵を募る京畿大に擾る得子乃遺筐を啓けは武臣
 十人の名を書き義朝を首とす即義朝を召義朝兵を引て族頼政等と

俱とも高松殿を衛まもる安藝守平清盛亦も召よす應こたへ入衛いりまもる是こゝに於おけ上皇使かみ者しやを使つかひ為なす義ぎを召よす為なす義ぎ辭ことばを曰いふ臣家おんけ傳つたへる所ところの八甲風やちがふ漂ひさると夢あむ心こゝろ甚こゝろ之をを惡にくむ往むかふ必かならず利あらざると使者しやせ之をを強あげより已やむ事ことを得えば諸子あまのこを率ひめて之をを赴おもむく上皇喜玉かみかみ判官代はんくわんだいと為なす邑むら及およ宝劍たからざしを賜たまふ因よて會あはれ戰いくさを議ぎす為なす朝進あそみ言ことふ曰いふ臣大戦おんたいせん二十小戦せうせん二百以もて九國くわんこくを笈あぶす少せうを以もて衆しゆを撃うつ毎ごとに夜攻やこうを利りす臣請おんせいふ今夜高松殿こんやたかたかたを襲おそひ其その三方さんぱうを火ひして之をを一面いっぺんに要えせん其善戰そのぜんせん者もの獨ひとり臣おん兄あに義朝ぎてうあり然しかれとも臣一矢おんひとやしか之をを斃ころさん清盛せいせい輩はいのときに至いたるは臣鎧袖おんよろいそで一觸ひとふせば皆みな自みづから倒たれるのそ則すなはち乘輿せりや必かならず出いでざるを得えず臣乃おん矢やを從したがひ兵へいを加くわへ輿こを此こゝに從したがひ陛下てんかを彼處かゝり奉たげん事掌ことぢやうと及およぶも易やすし則すなはち東方とうほう未まだ白しろざるは大事だいじなりん

賴長らいちやう曰いふ朝年少氣あそなせうきを負お言ことふ所皆鄙人あつじん私闘しとうの事何んぞ之をを帝王ていおうの戰いくさに施おこするけん當あたり堂々たうたうの陣じんを用もちふ南都なんとの僧兵そうへい召よす應こたへ至いたるんと守軍しゆじんを成なして以もて戰いくさふ未まだ晚おそしとせむと為なす朝退あそたいて竊ひそかに罵ののす曰いふ咲長袖さかちゆうの者もの惡にくんぞ兵へいを知らず家兄けあに謀まあり將まさに我われ為なると欲ほむ所ところは出いでんと僧兵そうへい寧須ねいしゆ危あやけんや為なす義又策ぎまたさくを進すすむ曰いふ木宮垣溝きみやうゑんこう單たん淺せん地ち據とる無なし寡わ兵へいを以もて此こゝを保まもつ計けい非あらざる陛下てんか宜よろしく南都なんと幸ゆふ宇治橋うぢはしを撤たげ以もて守まもる應こたへ即すなはち利りありよんば關東くわんと幸ゆふ臣おんが家人けにんを糾きう合ごう輿こを奉たげ關せき復ふせん臣おん之をを籌しゆる難かし賴長らいちやう聽きて為なす義退ぎたいて曰いふ吾死所われしよを知しらば也なり其その六子むつし賴賢らいけん賴仲らいちゆう為なす宗むね為なす成なり為なす朝あそ為なす仲ちゆうと八甲やちがを分わち之をを擐かへ一ひとを義朝ぎてう送おくる為なす朝軀あそく幹かん大だいに服ふくすべからず他甲たがを服ふくす獨ひとり二十八人にじゅうはちにんを以もて

諸將兵數百を以て分て諸門を守る義朝禁内小在り関白藤原忠通
 以下聚議快せし義朝數之を趣がす詔有て義朝を階下召計を問
 對て曰く勝を一舉に取る夜攻め若は無し臣聞南都の兵千餘上皇の
 徵不應ト已小宇治め吹すと其未に至るも及ぶ之を撃つと之小
 従ふ詔を戰勝は昇殿を聽さんと義朝對て曰く武臣戰ふ赴く生還
 を期せ臣請ふ賜を拜して死せんと衣を攝げを昇り營に還る鞭を
 車傍に繫へ曰我即戰死せば誰か我昇殿を得たるを知らん此之を識す
 ち皇と乃選兵四百を以て白河殿を襲ふ平清盛亦之赴く兵凡て數千
 人上皇の謀者還り報す為朝西て曰く固より當り然るべきものと頼長

為朝の用を為せざるを恐れ遽に拜して藏人と為す為朝曰く吾何んぞ
 藏人を用ふるを為人吾は鎮西八郎あて可なりと辞して拜せし將に戰んと
 ず為朝曰唯敵勁にして當り難き處輒我の命せよと平清盛西門を攻
 其將伊藤景綱の二子伊藤五伊藤六と先進す為朝之を射て五之
 胸を洞一六の袖小著清盛懼して退く其騎山田伊行返戦ふ為朝亦
 射て之を斃す馬逸して義朝の陣に入る鏃鞍を穿つ大き巨鑿の下し
 鎌田政家取て之を獻して曰く八郎君の為す所あり義朝の曰彼弱齡未
 だ此に至るべし詐り設け敵を怖のみ汝も之を試よ政家自呼て進
 為朝曰爾吾家人の非や對て曰昔は主君たり今は兇徒を射其月
 月中為朝大に怒り二十八騎を門を開き突出政家辟易退走す義

朝二百騎を以て之を馳大に戦ひ馬を莊嚴院の門に立為朝望み見く
 箭を注既めて之を舍曰く又此に在兄彼に在其潜約々勝敗互に
 相救護するも知るべからずと乃鳴鐘を注顧家季を謂て曰く吾且其
 魄を禱はんと射て胷を穿ちて門扇を貫く義朝大に驚き乃
 呼て曰く八郎射未だ精なりは為朝曰敢て為ざるのみ即許さんは
 甲之鬲胷之顯唯阿兄の命ざる所のまなりと乃大箭を注く深巢
 清國進を義朝を蔽ふ弦の應とて倒る義朝の兵死傷最多く為
 朝亦二十三騎を喪ふと猶固守す為義頼賢又拒ぐ天漸明義朝使
 を馳て奏し火攻を用んを請之を聽す乃火を風上り縦の煙焔宮を蔽
 宮中大に乱る義朝等鼓謀し終る之を階る上皇出走て如意山下

入為義將と東國に遁んとす病を行と能は乃髪を削り義朝を囚て降を
 請んとす為朝其不可と諫東國に赴んとす聽て遂に出降初清盛救を
 奉て為義を索し得ず會叔父平忠政出降素り際有より斬て之を獻
 以て義朝を揺す義朝詔とて為義を斬り義朝數已が戦功を以其命を
 贖んを請ふ帝怒曰く清盛能叔父を誅す義朝獨父を誅する能はらざる果
 しと能はしんは將子清盛の命と之を斬りめんを義朝憂懼し之を鎌田政
 家謀る政家對て曰此臣が敢て議る所に在らず然ども既國讐なるに竟に
 誅を免るべからず其人は死せんは寧ろ子に死せん義朝意決し政家を以て
 誘殺せし後自其首を奉て關に詣る頼賢以下五人皆誅し伏す猶四弟あり
 乙若亀若鶴若天王と以皆幼義朝詔を以人をして之を殺む為朝輪田に匿

將子鎮西奔んとす平氏の將平家貞之を要すと聞果さば適疾ありて
 民家浴す或其身魁偉なるを視て之を官の告ぐ官兵を遣へ之を圍む
 為朝裸躰柱を抉數人を擊殺遂に縛せり闕庭に至る特死一等を
 減其臂筋を抜大島を流す為朝筋力を減ずと雖も箭を用る却長を
 加ふ曰天子我大島を賜ふと遂に傍の五島を并せ有す舊臣稍々來り附
 後數年狩野介を殺して之を攻為朝射て其二艦を没自逃琉球入ると
 の義朝之捷賞して左馬頭と為而資望終平氏及す平氏素少納言
 藤原通憲と善通憲は帝の乳母の子なるを以て貴幸事任用義朝女を
 以て其婦と為んと欲す通憲之を卻けて曰我子は學生子か女偶も非と乃
 清盛と婚す帝既位を二條帝禪之猶政を聽嬖人藤原信賴通憲と

惡則浸義朝を引て自援義朝亦深之結ぶ平治元年十二月清盛熊
 野のり信賴乃義朝を謂て曰通憲寵を恃て自專清盛と子が
 家を剪除せんと謀る彼の專横上皇と雖亦之を厭ふ吾事を棄し讒
 人を誅夷せんと欲す子何を相助ざる義朝曰く吾殊功を建て父の命を
 贖不能は親屬推頼す清盛此時來我を陷んと欲我之を知ぶる
 非あは公此舉ある敢て力を效さらんや信賴大喜び鎧伏名馬を
 贈る此に於て義朝五百騎を以て夜三條殿を圍み之を焚又通憲の第
 を焚殺傷甚多遂に通憲を斬信賴帝及上皇を挾て大内子據る
 義朝の第三子右兵衛佐頼朝時年十三鬼武者といふ進て義朝を謂
 曰く清盛等將を還んとすと聞盡て逆戦はば坐かざるを待やと長兄

義平鎌倉に在り嘗て其叔父義賢と隙あり大藏に戦て之を斬り呼べ
 惡源太といふ遙く變を聞て晨夜馳至る信賴之官を授んとす義平
 辞て曰嚮ふ叔父八郎藏人を辞せ候緩急を知らず吾亦姑ら
 惡源太の號を用ふる可なり平氏將を還んとすと聞願くは吾二隊の兵
 を假り之を阿部野の要清盛以下の首を梟然後命を拜せん
 のみ信賴聽ば已はして清盛京師に入る帝上皇皆夜に乗れ逃れ出
 平氏の策に入信賴且起之を覺り意大に沮喪す義朝其兵を換ふ
 稍々散亡餘る所二千騎あり乃て諸宮門を守り免賴朝傳家
 寶刀截鬚を授け攜以て軍に臨む信賴騎は習はれ騎に墜左右
 之を扶け待賢門を守り平重盛來り攻信賴守を捨て走る重盛

五百騎を以て門を破て入義朝望見義平を呼び拒ぎ闘はむ義平乃鋪
 田政家三浦義澄平廣常平山季重然谷直實等十六騎と馬を距せ
 出其騎指視て曰赤甲とて黃馬なる者重盛なり宜く之を生擒は
 と進て大庭に戦ふ騎皆目を重盛に注ぐ之を追て七回す重盛走出
 生兵を以て入義平復撃て之を走らす義朝使を馳義平を讓て曰若何
 ぞ善拒か汝敵をく數入らむや義平乃出大宮巷に至り直み平氏の
 陣を衝陣潰れ重盛兩騎と走る義平之を追ひ及ぶ垂を馬跌く重
 盛暫を踰て逃政家之を射る甲堅して入らば義平曰馬を射よ馬を射る
 重盛墜追て之及ぶ其兩騎遮闘して死す重盛僅く身を以て免る義平
 父を慮て還て之を援け義朝方平賴盛と郁芳門に戦ひ大之を破る

頼朝射て二人を斃一人を傷く義平至り父を代て進戦ひ平氏の軍悉く敗走退て六波羅の第を保つ我軍北るを追信頼亦從て出半途はして逃走る平氏の兵虚を乘じて大内に入義朝直進を六波羅を攻む頼政獨六條磧に陣す義平其貳心あるを察し五十騎を以て之を突く頼政走て清盛歸す清盛我軍の至と聞大怖れ措を失倒る由を蒙る從者之を言ふ清盛曰帝後も在背角うはんと乃門を閉て固守す義平力戦門を排て入敵兵をかく更戦ふ我兵且より晡に至り十餘合刀折矢盡人馬皆傷く義朝自ら決戦せんと欲政家馬を扣諫て曰東國も走て後圖を為んと義朝乃兵を收退て三條磧に至る敵兵来り薄る平賀義信佐木秀義首藤俊通等救戦俊通之を死す義朝間を得て三十騎と東走す山門の

僧徒其敗を聞三百人を以て路を要す義朝之を患ふ齋藤實盛由を免僧徒と謂て曰公等我鎧仗を欲せば敢て愛まは然も子は衆我は寡周給する能はは請ふ之を抛擲せん公等自ら取れと乃其冑を投ぐ僧相蹂踐之を争ふ三十騎因て驅突て過ぎ八瀬に至り顧て信頼の来を見義朝を呼て曰子何ぞ我を棄るや義朝罵て曰豎子首謀りて乃先走何面ありて來て我を見るや鞭を擧其面を打ち之を棄て去り龍華に至り又僧徒路を要する遇ふ皆馬より下柵を破て過叔祖義隆矢よ中て死す子朝長股を射る箭を抜復戦ふ義朝怒り力戦て之を走す堅田に至り將を渡んとす風濤の起る會路を勢多る取ら乃實盛等二千餘人を散去せし免義平朝長頼朝義信政家及源重成堅豆金王之

従ふ頼朝騎睡して後夜森山の駅を過ぐ士兵聚りて捕へんと頼朝
 乃覺力を拔て二人を斬義朝頼朝の在るを怪み政家を返り索死之を
 獲鏡の駅に至る平氏不破の関を拒を聞乃ち問道より東に大雪の
 會て馬前を以て皆甲を釋步行す復頼朝と相失ふ青塚の驛に至る義
 朝嘗て駅長の女延壽を娶て一女を生是を於て其家を投て乃義平朝
 長を分ち遣り兵を信濃飛驒に募る朝長創劇く途より還り父を
 請て己を殺し追兵を獲る勿ふんと義朝乃之を刃す士兵義朝の在
 を聞羣衆之を圍む重成詐て義朝と稱し十餘人を射殺し面を
 刺て自殺す義朝乃走り又義信を遣て兵を募り義信曰く公何の
 適んと欲す内海に適長田忠致を依んと欲す義信曰く不可なるを彼性

勢を趨る恐は公に利ありと聽けりて訣る道塞く達せし此は大使玄
 光なる者あり延壽の母兄なり乃金玉を遣り就て謀る玄光乃航して義朝
 政家を載せ柴を以て之を覆ひ株瀬川より内海に如く途中危難を免ん
 明日内海に達す忠致厚く之を待す義朝亟か東去せんと欲時除夜の
 屬す忠致固く之を止む止まる三日忠致子景致密に其父を義朝を殺す
 勸む忠致之に従ふ乃力士三人を浴室に伏せ浴を進む金玉刀を操り浴に侍
 す力士敢て發せし義朝浴衣を求むるに至る金玉自出て之を取る力士
 乃入る義朝赤手搏て一人を仆す其二入偶刺之を殺す金玉浴室の譁
 を聞則返輒三人を斬政家方は忠致と飲交を聞起んとす酒を行き刀を
 拔て政家其刀を奪て之を斬景致後より政家を斬忠致の女の政家を嫁る者

義平奮勇

破難波

經房重圍

平家物語鎌田
政清與三左衛門
景安が首を取
項は十二月廿七
日巳の時をかり
一雨ぬりて靴
の輪はほらゐる



兼頼らひを義
平手形を解を兼
やとのたまひ
ふくくと手形を
切をど来たりけ
とあり
義平生年十九歳
時子取今此令を
出十實お老兵者
子頼は其お機天
資み出と雖抑又
所謂將種不囚る
まのなるぞ



夫の刀を伏て死す金玉玄光忠致父子を報んと欲し獲て數十人を殺し
馬を取て逃去忠致乃義朝及政家の首を平氏に獻す義朝政家と年
並み三十八信賴以下皆誅す伏す義平飛驒に在りて來り屬者甚多し
義朝の死を聞皆散す自盡んと欲せしが父仇を報て死すこと念ひ服せ
變て京師に入三條烏丸に舍す之を平氏に告る者ありて平氏乃難波經
房を以て三百騎を以て之を圍む義平刀を抜て出數人を斬り躍て屋外
往所を知り此より晝伏夜行以て平氏を伺ひ東近江の舊人に倚んと欲し
行て逢阪に至る經房關の神祠に詣り途に義平の困臥するを見五十騎を
以て之を圍む義平蹶起するに箭臂の中り刀を揮ふ能はば縛せられ終り六
條磧に斬り刑に臨み首を仰ぎ平氏の墓を睨み曰保元の乱斬り處に在る者

夜を以て今乃白日我を斬平族何れ無状なる必嚮我言を行はば奴輩
遺類無んとして遂に斬る時年二十賴朝の父兄と相失ふ夜迷て路を失し
小平山に山村に送るを青塚駅延壽の家に至り賴朝截鬚刀を延
壽に托し去り關東より途に平氏の將平宗清を虜せん六波羅に至る斬り
就日あり宗清之を謂て曰活を欲するに曰然り父兄皆亡ふ吾も非し誰ら
其冥福を祈らん宗清清盛の後母池尼に詣り尼賴朝の容貌を問宗清
甚だ右馬君に肖りと對ふ右馬は蓋尼の子蚤死せし者尼之を悲む為に
清盛を請ふ再三乃死を宥し蛭島に流さる道傍觀者其威容有るを見相
語て曰是猶虎を野に放のみと舊臣皆其髮を削るを勸む獨秩父盛安
其耳の附語て曰郎君髮を存るを以て前途を待べし賴朝首肯して去る

賴朝六年あり義門蚤死す希義駿河に居虜せしむ土佐に流さる範頼
 藤原範秀の養はる蒲冠者と稱す平氏問ざるなり今若し若牛若の二
 兒皆婢常盤の母より出るなり並母より從て龍門の里に匿る平氏之を索て
 獲て因て常盤の母を捕ふ常盤乃自至る清盛其色を悦び密に之を挑
 肯せし其母泣泣に説く禍福を以てす己を得ば之を從ふ清盛乃三兒を
 釋し盡く僧と為す今若名を全成と改め醍醐に居りし若名を義圓
 と更め圓慧法親王の事か牛若甫二歳鞍馬山寺に居り遮那王と稱
 未だ髮を削らば平氏勢威歳々月々盛なり賴朝の配所なる伊豆の
 人伊東祐親北條時政平氏の令を奉り之を監視す關東の舊臣其意を
 賴朝に屬者も亦敢て來り通せし獨佐々木秀義近江より來り相摸み

寓ト澁谷重國の倚り其子定綱等とて數賴朝を問む安達盛長
 加藤景廉等亦往來給仕す賴朝深沈大略あり性堅忍喜怒色を形に
 衆より畏愛せしる清盛累遷太政大臣に至る其妻の娵法皇の幸せしむ
 皇子を生遂に禪を受く是を高倉帝と申奉る清盛の女を納れ之を中
 宮と為す牛若鞍馬に在る年十の時嘗て諸家系譜を見自先世を知り
 悵恨するといふ是に於て晝書を讀夜劍搏を學ふ人と為短小精悍面
 白く齒出つ甚趨捷なり衆僧に患苦せしむ師亦其髮を削る進む牛若
 肯せし時藤原清衡の孫秀衡鎮守府將軍たり牛若往て之を倚んと欲
 適鐵賈吉次なる者あり陸奥に往來す其山に詣り會牛若陰に之を意
 中を語り吉次曰事甚易し然とも子を取去ば恐くは僧徒の怒り遭ん

牛若笑て曰彼輩我を苦しむ我去るは其欲る所のみと又下総人深棲頼
重山詣るか會牛若之と狎是を於て三人與に偕る東鏡驛に至る牛若
自ら冠を加え名を義経とひ九郎と稱す遂に下総に至り居數月盜數
十の劫を為義経赴き救ひ立よ四人を斬頼重其勇に服す而物議を
憚り稍之を戒む義経乃去て上野を經伊勢入義盛を得約て君臣と為
陸奥に至り吉次因て秀衡の通ず秀衡善之を遇す陸奥に在る佐藤嗣
信兄弟を得たり時兼安四年なり是時當て陸奥出羽を除の外盡く
平氏の管する所係所在源氏皆人の擯斥せらる獨兵庫頭頼政平治中
意を決し官軍の屬杖藝多く昇殿を聽さる嘗て敕を奉りて怪禽を
寢殿上射たり帝嘉賞し恩賜あり後遂に從四位に叙す治承元年

叡山の僧徒神璽を擁し闕を犯す武臣に詔して之を拒がむ頼政違智
門を守る僧兵來り攻頼政智辯を以て之を退く僧兵敗れ還り再舉
を欲す大納言藤原成親に敕し之を討す成親初法皇の密旨を受ると
稱し陰に平氏を圖る事を託し兵を聚む摂津源氏行綱其謀を與し
己はして衆寡敵せざるを度り自ら清盛に告清盛成親等を捕へ悉く
之を殺す二年清盛の女皇子を生立て太子と為り明年清盛法皇を從
鳥羽に幽す四年帝を廢し太子と立是を安徳帝と申奉る平氏外祖を
以て益專横頼政從三位と為り髮を削りて老す子仲綱伊豆守と為名
馬あり宗盛數之を借んと欲仲綱肯せは頼政仲綱を以て之を許さむ
宗盛借て還さる大に客を會し其馬を出し仲綱の二字を烙記し仲綱を以

馬と呼仲細父と之を憤る賴政素以仁王善王は法皇の二子なり高倉の
 宮と稱す賴政嘗て夜高倉詣り從客説く曰大王は上皇に於て庶兄た
 る今よ於伯父たり又徳無備天人交應ず而未だ親王為を得ぬは臣
 臣竊か大王の為よ之を羞亦近日清盛の為所を見ぬは臣廢立生殺
 一其私に從ふ今之時に當り大王亦竟に終を保能はせぬは平氏の權
 を專するより諸州の源氏編戸に列り皆奴僕使せん憤怒鬱積すと因
 指と屈し之を舉賴朝義経以下四十餘人を得曰く大王誠か能く
 義に仗罪を聲は此輩皆檄を傳て致すべきなり何を速に大事を舉
 上法皇を幽厄に板下萬姓の塗炭を援ぬはさるやと王意悦ぬ終に之を
 聽す會行家熊野より來賴政之を王に薦行家は故の為義の第十

子なり是年五月行家を拜して藏人と為し密に王の令旨を齎し以て
 諸源に諭す賴朝嫡宗たるを以て一通を賜ふ行家又新宮の僧徒を誘ふ
 僧徒相告語て謀泄熊野別當馳て平氏に告ぐ平氏未だ事端を悉
 さば兵を遣て王宮を圍む賴政の次子兼綱檢非違使たるを遣中より
 て急よ之を賴政に告ぐ賴政即使を王宮に馳告て曰急よ逃て園城寺に
 之の臣等將を追赴んと王の隸士長谷部信連王の婦人の服を被落し
 ちるに門を開いて待味爽吏卒門に入り呼て王を索む信連大に罵り
 十餘人を殺傷し執へん終に王の在す所を告げ賴政其筭を焚仲綱
 兼綱等五十餘人を率て追て王の所へ赴く舊臣渡邊競平氏の筭後居
 衆之を呼て與に偕せん欲す賴政曰以て為ちのれ彼呼ばる來る者と

已して宗盛頼政の奔を聞人を以て競を關しむる在るれば乃ち見て問
て曰三位述り汝何を以て從はざる競伴り答て曰近三位と際あり故
聞知せざるなりと宗盛厚祿を以て誘す競伴り喜て之を從因て言新
報效を圖らん獨馬無を患ふと宗盛乃愛す所の駿馬を與ふ競舎
歸り結束其馬を騎平氏の門を過呼て曰渡邊競は源家の舊臣何を
能節を改仇敵ははんや今將三位を赴き援んとす何を要撃せざる
やと平氏敢て出る者無一遂に園城寺に至る仲綱太喜其馬の鬣尾を
截宗盛の二字を烙記平氏の策を驅入む馬厩に入他馬と相踈留す策
驚駭す宗盛慚志是に於て頼政敵山南都を招き並に王を援て因て
策を獻て曰今夜羸兵千を遣火を三條に縱ら以て平氏の兵を誘且戰

且卻き而て精騎數百遣て六波羅を襲はし必克を得ん僧真海者陰
平氏に附故に異議を發て之を沮む天遂に明平氏亦利を以山徒の
ゆむ山徒叛く頼政乃王を奉り南都に走る王騎の習はるに墜る六因
平等院の息平知盛等二萬騎を以て追至る頼政空治橋板を撤し
之を拒ぐ平氏の兵橋架を縁來り戦ふ渡邊競等善拒ぎ殺傷過當
已して敵流を乱して大に至る頼政流矢の中り膝を傷く無綱亦戰死す
頼政乃王を脱せし免自ら還戦し射す敵敢て迫らば乃院に入鎧を
釋其騎を謂て曰吾年已も七十七天下の爲に義を倡ふ以て死すべきあり
と仲綱と皆自刃す王途に追兵を獲らん俎す皆首を京師に傳ふ清盛
諸源の已て圖るを聞法皇を幽する益固く六月迫り都を福原に徙し

遂に諸源を誅鋤せんと欲す三善康信書を飛して頼朝に戒し先早
備を為し頼朝初伊東祐親の家を寄事と以て相惡し乃北條時政を倚
時政素之を器と以て其女政子を妻す以仁王の令旨至り會て頼朝大喜
陰に時政と兵を擧ると謀り平兼隆伊豆の目代として八牧の塞に居る先
之を撃んと計る時大庭景親京師より歸り清盛の旨を以て頼朝を
圖る之を佐と水秀義の語り秀義密に其子定綱を以て馳て之を頼朝に
告し頼朝乃先發せんと欲し大事を擧ることを定綱の語り子此に留て
諸勇を招致すべし定綱還て鎧仗を取與ふ俱来んと請乃去り三勇
經高盛綱高綱を率ゐて至る是に於て頼朝時政等八十騎をして八
牧を攻め先盛綱及加藤景廉を留て自ら衛り時八月十七日なり

時政昏を待て發す頼朝之を呼還て曰吾何を以て勝敗を知らん對曰
勝は即火を擧る苟敗れば使を馳て之を報せん君自ら計を為し乃往
敵の驍將堤信遠別居に塞に居る佐々木氏を以て之を攻め經高前門に
入信遠寇有と知り刀を揮て出時月己に山經高之を見り刀を交定綱
高綱繼至り遂に信遠を斬り亦八牧に赴り頼朝人を樹り升らせ火を望
む火擧るに景廉を顧りて赴援し先羅刀を授て曰我為し兼隆を斬と
景廉僕洲崎三郎と俱に八牧に赴ば戦方は酬なり塞堅じて拔は景廉
進で塹に迫り弓弦を以て楯板を綴り塹に投て渡り壘を踰り入敵関屋
八郎といふ者善射三郎進で箭に當て死す景廉後より進で八郎を擊殺
遂に又一人を殺し寢及ぶ寢戸開かり戸内燭あり乃冑を脱羅刀を以て

人の戸内を窺ふ状のごくす無隆敵人の入と謂ひ之を撃景廉刀を揮て
 無隆を斬燭火を以て屏障を傳以て出頼朝火の擧るを望み大に喜ぶ
 己はして時政等凱旋す景廉無隆の首を提頼朝に視て曰公天下を
 定る此を以て卜す吉きなりと伊豆入狩野茂光相模の人土肥實平等
 稍々来り集る土肥の里に會し事を討る是に於て安達盛長に令旨を
 傳へ八州の豪傑大庭首藤三浦千葉平廣常等歴説せむ之に應
 ずる者も未だ至らず二十三日頼朝三百騎を以て石橋山に軍す明日大庭
 景親首藤経俊等の三千騎来り攻日暮に會或明日を待て戦はん
 議す景親三浦黨の未だ至らざるに及んで戦んと欲し進を挑戰ふ景親
 景尚と先進す頼朝岡崎義實を召し孰れ彼兄弟に當る者ぞと問

義實は三浦義明の弟伊豆に居者なり是に於て其子義忠を薦義忠
 命を受て退く僕家安從て進む義忠景尚に遇搏て之を伏せ從者を呼
 未だ屬に敵入長尾為宗来りて景尚を援く時夜黒大雨双尺を辨せ以
 義忠曰上なる者景尚なり景尚曰上なる者義忠なりと為宗進て其鎧を
 摸義忠足を揚て之を蹴り急み刀を抜て景尚を刺刀室を脱せ以て為宗
 の身定景亦来り義忠遂に殺さる家安之に死す明るに我兵大に敗れ
 走て杉山に入敵兵羣追頼朝駿へ自射敵強に應て倒る景廉馬を扣
 諫止自佐々木高綱天野遠景等と留戦ふ高綱の弟義清景親の妹
 を娶る追騎中に在り高綱呼を曰汝一婦人の故を以て君に背親に離る
 何ぞ甚恥無き因て奮闘數敵兵を卻く頼朝間を得獨土肥實平と

險を冒し逃走時政等六人頼朝を踪来り其僵樹上より立を見る實平
曰人多ければ頼朝人宜く散去すと頼朝乃時政を甲斐に赴き見其
諸源を發す其餘皆後會を期して散去獨實平と俱に匿る景親大に
山谷を索む其族梶原景時頼朝の匿る所の處を知り故に之を他
導く景親亦頼朝の自殺すると聞使を馳て京師に告頼朝既免れ
秋山と山箱根山に匿る初三浦義明子の義澄義連庶孫義盛
等を遣三百騎を以て頼朝を石橋山の會せし酒匂に至り頼朝敗死す
と聞乃還る畠山重忠と小坪の戦を克く歸り衣笠城を守り重忠三
千騎を以て之を攻む城竟に陷る義明義澄等謂て曰佐公勇略あり
一敗して死する者非汝が輩宜索て従ふべし吾老たり行能は止て此

死すと義澄等固く扶け行んと請ふ聽ば遂に敵兵の為に獲られ
死す義澄等海に航し安房に走り頼朝を索頼朝箱根山に匿僧家
舟投せり逃出山に循り土肥に走り真鶴崎より舟に上安房に赴き土肥實
平岡崎義實之に従ふ此時に當り海陸皆敵二人心を盡し防獲數日時
一大船甲士を載る者を見望見る二人急ぎ頼朝を船腹に匿す至れば則ち
三浦氏より義實を見て争て佐公何在と問義實朝對へて曰吾亦
公を索るのみと義澄等泣て曰吾父を棄て去る者公を見んを欲るのみ
今與に俱に死せざるを悔頼朝之を聞匍匐して出義澄敬喜拜して曰
君此に在り以父の言果驗あり頼朝義明の死を聞悲慟す義實亦義
忠の死狀を語り相共泣滂す義盛進て曰諸君何ぞ徒泣を為盡く早

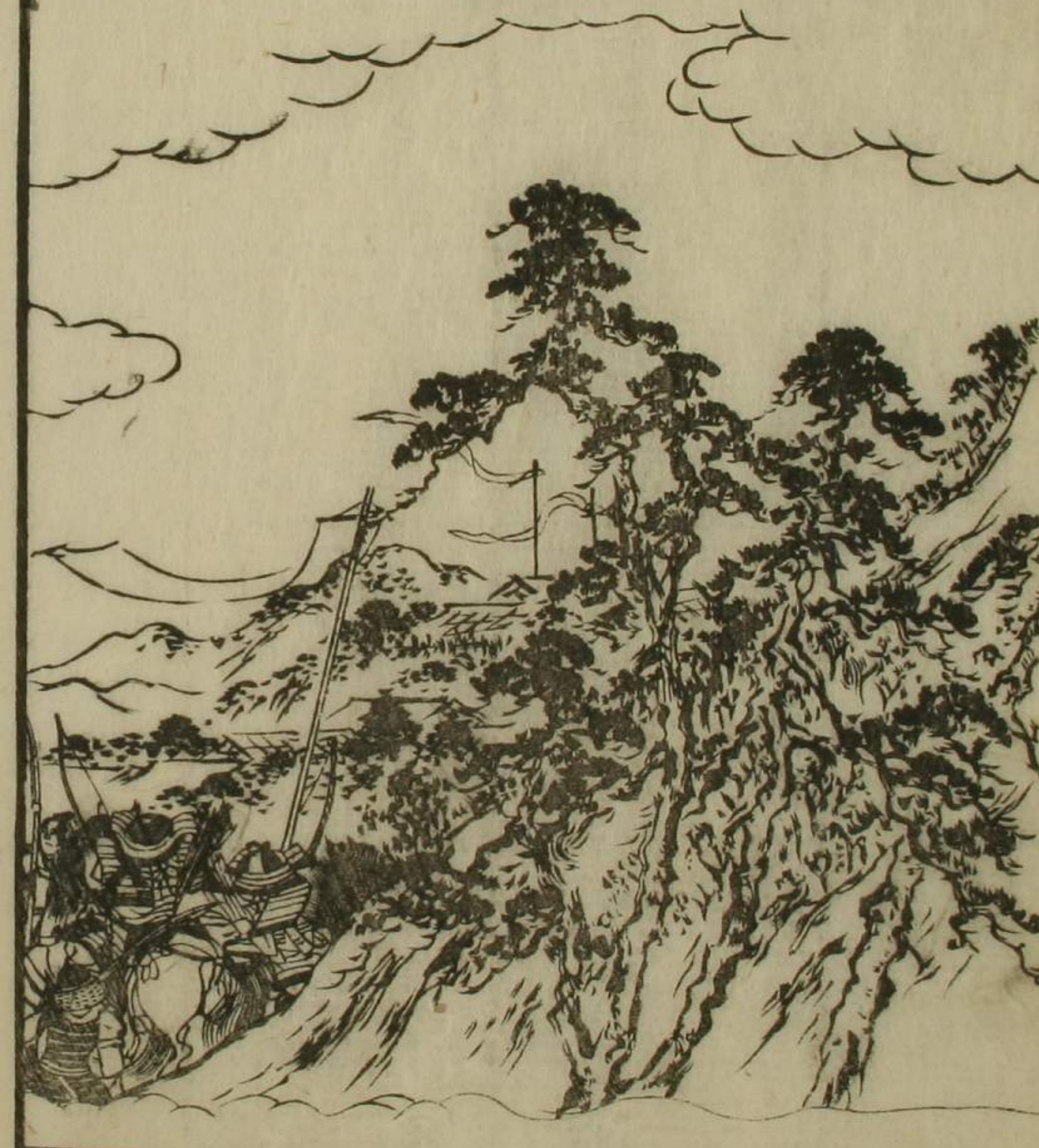
義仲偽

旗策

破城資

成之軍

孫子軍爭篇
云夜戰多
火鼓畫戰多
旌旗所以變
民之耳目也



然れば則夜
の火鼓と畫
の旌旗は戰
中み松を其
關係する所
至重なりて
忽緒十べの
らざる者之
義仲の計策
皆能く此能
み通曉せし
者と謂ふ



大事を議せざる諺曰食を欲者は器を先す嚮ふ藤原忠清相國の命を以て士所の別當為時八州の士人其門を君羊す臣意之を欽君志を得ぬは願は臣に授るか此職を以て多し頼朝笑之を諾す頼朝乃安房より檄を遠近に移來り會せしむ九月小山朝政下河邊行平三百騎を得進で下總に赴く千葉常胤州の目代千田親政を擣り兵三百騎を以て國府に迎へ謁す因て策を建て曰多し旗幕を張て以て觀望の者を誘べしと頼朝之に従ふ進で隅田川に至る時平廣常萬騎を以て來り會し頼朝を見と欲す頼朝朝見は實平とて言ふ曰吾救を奉り義を擧ぐ汝何を速に來りる後陣に在て召呼を待たしと廣常悚然退る人謂く曰此公必大事を成ん吾我衆を以て來て其孤弱を援く

其此のてをば圖らうと頼朝既し廣常の兵を并し又石橋の散兵來歸り會軍大に振ふ是より先石橋の報京師に至る清盛大に喜ぶこはしと頼朝未死せし勢復振ふと聞則恐れ十月孫維盛身忠度を遣り五萬騎を以て來り攻藤原忠清軍を監し齋藤實盛郷導たり頼朝諸將を召て議す廣常進で曰敵の未だ足柄を踰ざるに及で武藏相模を取て二州既し獲は天下唯君の欲る所のまありと頼朝之を然りと河を濟て軍す畠山重忠江戸重長等來降る是より於て武藏相模の豪傑相告て來り降る兵凡十餘萬乃鎌倉に入立幕府と為し諸將士を部署し遂に親將として西平氏を逆へ撃つ八州の將士争追て之より附足柄山を踰る比凡二十餘萬騎北條時政武田信義等の兵を引來て之より會す信義は

義光の曾孫なり世甲斐に居る其子信光身安田義定等と別兵二萬を擧
 南駿河入大庭景親身景尚と兵千餘を以て走て維盛に歸んと欲甲斐の兵
 路を塞を聞乃首藤経俊長尾定景等と俱に來り降る景尚義定は波
 太山に遇ひ戰敗遁走て維盛に歸す信光又州の目代長田入道父子を斬る
 平賀義信其子維義亦信濃の兵を發し來り賴朝に屬す賴朝乃諸軍を
 合せ進で維盛と富士河を夾を陣す初維盛東より來る者賴朝の兵數
 を問對て曰八州草木風靡非せざるは無山と無川と無皆其兵なりと已に
 賴朝河東に至白旗林立之を望み際し維盛又實盛は東國の兵勢如何
 を問實盛盛は東兵の強勇と説蓋實盛藤原の忠清と事と議を合は
 既維盛に對て遂に辭を西す一軍恐怖す維盛忠清を以て先鋒とす

河岸に至河水方漲る兩軍相持て未だ戰はば武田信光我先鋒たり使を
 平氏の營に遣し與戰期を約す平氏答は信光兵を潛めて間道より夜
 西軍の後に出づ道大澤を經鶴鴨驚起す西軍大に駛潰走す賴朝此を
 追遂し西せんと欲す常胤廣常義澄皆説て曰常胤諸州未服せ候
 恐は我後を窺はん先關東を定め然後西伐せん未晚と為さるなり
 と賴朝之に従ふ乃信義は駿河を義定に遠江を守り兵を引て還り
 黄瀬川に次す會一將有二十騎を率ゐ來り實平は因て賴朝を見んを
 求む賴朝狀を問對て曰年齢干左右面目俊邁と曰是陸奥の九郎なり
 丞呼入實平導て幕に入果て義經に曰阿兄義を起すを聞喜自ら
 禁せは因て秀衡を辭し來ると賴朝大喜を曰八幡公の東征新羅公の

来援_二遇_一曰猶故將軍を見_レ如_レと今我汝_二遇_一猶頭公を見_レ如_レとありと
兄弟相對涕泣是時賴朝の諸弟希義土佐_二在_レ平氏_一を殺_レる範
賴全成義圓皆来_レ歸_レ賴朝鎌倉_二還_レり大_二刑賞_一を行_レふ長田入道
父子_二首_一を梟_レ大庭景親を斬_レ乃首藤経俊を斬_レんとす其母嘗_レて賴
朝を乳養する_レみよ_レ為_レる夜を請_レふ之を宥_レす長尾定景を岡崎義實_二
賜_レひ曰乃子の仇_レち_レ義實又請_レて_レ死_レを宥_レす伊東祐親海_二航_一西奔せ
んと欲_レ天野遠景_二捕_レへん三浦氏_二囚_レす佐々木義清降_レる亦父兄の
故を以_レて之を宥_レす十月賴朝兵を將_レて佐竹義政を常陸_二攻_レ廣常と
一を説降_レじ免_レ之を誘_レ殺_レす其姪秀義金砂の城_二據_レ廣常亦秀義の
叔父義弘を誘_レ利を以_レて内應_レを為_レし免_レ兵を潛_レ免城_二入_レ擊_レ手_レ秀義を

走_レじ其邑を分_レて將士_二賜_レふ十二月新館成徒_二居_レ將士_一三百餘人各邸第
と占_レ邸第_二邸_一は諸侯来朝_レを舍_レする所を以_レて有_レ根柢也
根本の有_レ所_一なり第_二は宅_一に甲_レ乙_レ次第有_レて以_レて別_レ士所_二置_レ和田義盛を
以_レて別當_レ充_レ其前諾を踐_レち_レ是時_二當_レて諸道の豪傑兵_一を起_レ以_レ
賴朝_二應_レずる者甚_レは河野氏南海_二起_レる菜池氏緒方氏鎮西丹山水氏
柏木氏近江_二起_レる而_レ木曾義仲信濃_二起_レる義仲幼_レみ_レ孤島山重能
義平の命を受_レ之を殺_レんと欲_レて忍_レび之を齋藤實盛_二託_レす實盛更_レ丹之を
中原無遠_二木曾_一託_レす木曾氏_二稱_レす稍長_レて壯偉多力善射潛_レ京師_二
入_レ平氏を覲_レ者數以_レ仁王の令旨_二至_レ及_レび喜_レを兵を集_レめ立_レ二千餘人_一を
得_レたり石橋の事起_レるを聞_レ赴_レ援_レんと欲_レ州入笠原賴直_二平氏_一の為_レ来_レ攻_レり
分會_レ義仲殺_レ手_レ之を走_レじ因_レて木曾峽_二據_レ養和元年春清盛薨_レす

宗盛嗣遺命を以て諸牙を遣兵を將て東下す賴朝和田義盛を遣り安
 田義定を援け先遠江を守賴朝の叔父義廣常陸に在り叛を謀小山
 朝政を撃破れ奔て義仲に歸す賴朝の季父行家美濃に在り平氏と
 戦ひ敗れ退く賴朝弟義圓を遣り兵を將て赴援く三月行家義圓兵二
 千を以平重衡の七千騎と墨股河を夾く軍す義圓夜身を挺て河を渡り
 平氏の邏騎を獲れんと戦死す行家進軍を利あり戦ひ且走り矢矧川を
 保ち策を回し東軍の大に至ると飛言せし西軍恐て退く行家遂に
 京師に入んと欲し援を山徒に請應せ乃奔て賴朝に歸す是より先
 宗盛陸奥の藤原氏に賴朝を攻む藤原氏聽て又越後の城氏に義仲
 を攻む六月城資長兵萬餘を發して信濃に入る義仲三伏を設撃して

其九千人を殺す九月平通盛等亦來り攻越前に逆へ撃て大に之を敗
 壽永元年城長茂四萬騎を以て來り攻義仲見兵三千有井上九郎源
 光基の策を以て分て七隊とし赤旗を張て之を迎ふ敵平氏の黨あり
 と為漸迫く及んで赤旗を白旗と樹て急よ之に迫る敵軍驚潰し
 長茂創を被て走る北陸の豪傑悉く義仲に附武田信光事を以て
 義仲を賴朝に構す又行家の鎌倉に來り邑を請て自給せんとする會
 賴朝曰吾十州を取り義仲五州を取公亦盡く自ら取らんと行家慍り
 千餘騎以て去り義仲に歸す賴朝大に怒二年三月親て十萬騎を將て
 信濃に入義仲を越後へ避く賴朝亦兵を引て還り使を以て義仲に
 言し曰平氏罪惡貫盈朝廷我宗に命て之を討む當り日夜命を

赴くべし而十郎私兵を構へ我を圍る子亦之を庇し西を捨て東に向
 は何れも苟も他心無は則請速に十郎を逐へ否れば貴息を養ふ子
 と為を得ん二者聽ずんば將は八州の卒を以て子と相見んとす義仲遂
 に子義高を遣て質とす四月平氏十餘萬騎を以て東伐先義仲を
 撃攻て燧の城を陥れ西兵勝み乘て連て諸城を陥る五月西將平盛
 俊進で般若野に至る義仲越後の國府に在て今井兼平を遣り馳て
 先寒原の險を奪ひ盛俊を撃破西軍退き志雄礪並山に向ふ樋口
 無光等も謂て曰彼衆我寡彼山を舍て東下し平地に就て戦は我利也
 あらば我先山の東麓に陣せば敵必巔を下り陣せん我一軍遠て山西に
 出て敵を南壑中に驅一擧して塵すべきなりと諸將皆曰善と乃ち萬

人を分て無光等も屬自ら三萬人を將進で東麓に至り旗幟を益し
 林を蔽て軍す平氏之を望み見果て巔を下り山腹に陣し兩軍射戦
 終日す而も無光等己も敵背に在日暮萬人鼓譟突出す義仲兵を麾
 てより西軍を夾て撃西軍大潰走し南壑に陥て死者幾ど二萬人壑
 為み填塞す平氏の將帥僅も身を以て免れ散兵を収免佐良岳を保
 初義仲行家とて別も兵も將も志雄山に向はむ戦利あり義仲
 赴き援て西軍戦ははて走る走るを追て小楯林に陣し相持て未だ
 戦は西兵我が夜襲を謀ると聞て怖れ走り争て安宅の渡を渡り
 溺れ死する者千餘人既も渡り橋を截て陣す義仲渡頭も至濁流方も
 漲る試も馬十匹を放つ水馬腹も及ぶ全軍之に従て渡終も大も西軍を破

勝子乘之北を追進を越前に至り齋明及び齋藤實盛等と獲たり
平氏既連義仲破れ走京師歸る義仲進近江に至り山
徒を誘七月湖を濟て叡山軍宗盛大怒舉族乘輿を授西奔す
法皇平氏を避て叡山幸す義仲行家と北兵六萬帥路を分て
京師入京人相語今日復白旗を見入は圖をざりしと言合りる

史學童觀抄卷二終

日本橋通二丁目	須原屋茂兵衛
同 二丁目	山城屋佐兵衛
同 所	小林新兵衛
芝神明前	岡田屋嘉七
同 所	和泉屋市兵衛
通油町	藤岡屋慶次郎
馬喰町貳丁目	森屋治兵衛
同 所	山口屋藤兵衛
浅草芽町二丁目	須原屋伊八
横山町壹丁目	出雲寺萬次郎
同 三丁目	和泉屋金右衛門
兩國吉川町	大黒屋平吉坂

